新わが社の戦略 107

「猫砂」新たな収入源に

ヒノキ残材活用 シェア10%視野

帝国造林
（造林業）
植竹 雅弘社長（45）

県内有数規模の社有林を所有し、上質の八溝材を産出する帝国造林。国産材価格の長期低落が続く中、ヒノキ残材を活用した「猫砂」製造による経営安定化の取り組みが評価され、昨年度の農林水産祭（農水省など共催）林産部門で日本農林漁業振興会長賞を受賞した。（聞き手　早川茂樹）

―社有林の規模は。

「創業時に買った大田原市（旧黒羽町）南方地区の545㌶のほか、北野上地区に300～800㌶ずつ皆伐し、また、その場所に苗木を植え、育てていく方法で、毎年均等に、継続的に木材を産出できる」

―販売先は。

「地元の製材業者のみ。伝統的な立木取引で高品質の木材を、市場より有利に販売している。伐採したその場で葉枯らし（自然乾燥）を行うことで、色合いもよくなり、高い付加価値が生まれる」

―木材価格は30年前のピーク時に比べ、杉柱材で3分の1になったと聞く。林業経営は厳しそうだ。

「伐採で出る利益は、苗木代と苗木を植える手間代でマイナスになる。補助金もあるにはあるが、70年手入れして、ようやく商品になる。山は国からの預かり物、経営は地域環境保全のボランティアだと思っている」

―造林業を維持するには、経営多角化が必要だった、と。

「先代社長は母。後継者難で三男の私が継いだが、林業だけではやっていけない。山を荒らさないため、山を守る人材の雇用確保のため、新たな収益源が必要だった」

―多角化で猫の排せつ物を固めて処理する「猫砂」を選んだ理由は。

「ヒノキには消臭、抗菌作用があり、猫砂に格好の原料。毎年30㌶の間伐で生じる残材も有効活用できる。猫砂は年間500億円市場。使用後の廃棄が困難な鉱物（ベントナイト）を原料とする商品が多い。ヒノキを粉砕し、ペレット化した猫砂は、トイレに流せるし、焼却もできる優位性からシェア拡大が可能と判断した」

―「猫砂」の売り上げ、今後の目標は。

「約2年の準備、試作を経て、昨年度からOEM（相手先ブランドによる生産）を含め月産3万袋（1袋8㌔㍑）の出荷体制ができ、利益が出始めた。売上高は3千万円で、林業とほぼ肩を並べた。今後は弊社のノウハウで業務提携やフランチャイズ展開を進め、5年後に全国シェア10%を目指す」

「山を守る人材の雇用を確保するためにも、猫砂製造に参入した」という植竹社長（左から2人目）＝大田原市南方の猫砂製造プラント

企業プロフィル

〈本社〉大田原市黒羽向町42
〈設立〉1913年
〈資本金〉1千万円
〈売上高〉1億8457万円（2009年3月期）
〈従業員〉15人（パートを含む）

うえたけ・まさひろ　1964年、旧黒羽町生まれ。大田原高を卒業後、会計事務所、一徳酒造（小山市）勤務、海外駐在業務などを経て、2003年5月から現職。